

大学図書館での読書推進

—その背景と今後の活動への視点—

Promotion of Reading at a University Library: Its Background and Perspective on Future Activities

浦田 葉子 URATA YOKO

概要

大学図書館では読書推進のために読書手帳を導入した。本稿では導入に到った背景である大学生の読書離れの傾向が、全国的なものであることを示す。さらに他の読書推進活動への取り組み事例を取り上げ、その中から、活動の参考になる点を見いだした。今後の読書推進活動において特に重要ではないかと思われるのは、読書になじみがない人々の置かれている状況に目を向けることである。

キーワード

大学図書館、読書推進、読書手帳

目次

- 1 大学図書館での読書手帳の導入
- 2 読書手帳とは何か
- 3 大学図書館で読書手帳を導入する理由
- 4 大学生と読書
- 5 読書推進活動の事例

1 大学図書館での読書手帳の導入

A 大学 T 図書館では、今年度、学生向けに読書手帳を導入した。T 図書館があるキャンパスには、学部が一つあるが、そこでは経済学、経営学、情報学、社会学、法学などを中心に学ぶことができる。図書館は学部学生と教職員の他に地域住民、他機関研究者にも利用されている。

読書手帳を導入開始したのは、2017 年春である。例年行っている新入生向け図書館ガイダンスに読書手帳作成を取り入れた。これは記入欄を印刷した紙を折り畳んで手帳にするものであり、学生は図書館職員に習いながら自分の読書手帳を作成して持ち帰った。

2017 年秋、10 月と 11 月には、在学生全員を対象に読書手帳キャンペーンを行っている。学生が記入した読書手帳の記録を図書館職員に見せることでポイントを得ることとした。ポイン

トによって、景品を用意している。ポスター掲示と大学ホームページを使った広報に加え、教員には案内を配布し、学生への周知を依頼した。

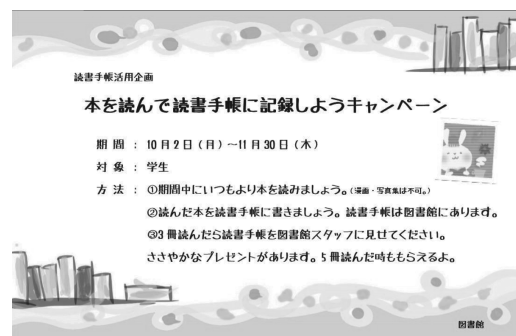


写真1 読書手帳キャンペーンポスター



写真2 読書手帳と景品

2 読書手帳とは何か

読書手帳とは読んだ本の情報を記録する手帳である。基本的には著者名、書名、出版社などの文献情報を記入する。読書手帳には感想、意見、要約などを書く場合もあり、本を読んで考える機会となる。

インターネット上には読書手帳（読書通帳が多くなっている）の利用ができる図書館のリストがある（『読書手帳』実施の図書館）。読書通帳の利用が広まっているのは、読書の記録を残すことが、読書をしたという達成感につながるからだと想定する。その意味で読書手帳は読書推進の一つの方法となり得る。

読書通帳は銀行通帳の形をして、機械で本の情報を印字するものである。公共図書館を中心に広がっているが、

サーバにデータ転送するため、個人が読んだ本の情報セキュリティ保護の点で、注意が必要だと指摘がある（『図書館の自由』第93号）。

3 大学図書館で読書手帳を導入する理由

T 図書館では、大学図書館は「学生の学ぶ意欲を喚起する空間である」という方針の下に、資料収集とその利用のためのガイダンスを企画・実施している。資料検索方法や、レポートの書き方の指導などでは授業との連携も行っている。1階に設けた「共に学ぶゾーン」では、相談しながら課題をこなすことができる。それ以外ではPC利用、DVD視聴、新聞雑誌閲覧の利用が見られる。しかし、図書館に活気があるとは言いがたく、特に図書貸し出しが低調である。

学生の読書推進のために、何をすべきか。図書館司書の読書手帳導入の提案に委員が賛同した。読書手帳は子供向けの印象があるが、ポイン

トがたまる楽しさは大学生にも共有できるはずである。

大学図書館だからといって、自然に学生が利用するわけではない。設備、蔵書、利用サービスに力を入れても、利用は増えない。次の節では、大学生の読書の現状に触れる。

4 大学生と読書

2016年10月～11月に、全国の国公立および私立大学の学部学生を対象に、学生生活実態調査が行われた。その調査結果である「第52回学生生活実態調査の概要報告」の中に読書時間に関する質問がある。読書時間の実態を概要報告3. 日常生活について（2）読書時間・勉強時間より抜粋する。

1日の読書時間は平均24.4分、有額平均48.6分と、前年からそれぞれ-4.4分と-4.3分となった。

1日の読書時間が「0」は49.1%（文系43.9%・理系50.2%・医歯薬61.6%）と、前年から3.9ポイント増加し、「0」が40%台になった13年以降3年間で8.6ポイント増となった。

アルバイト就労の有無でみると、就労している学生の平均読書時間が22.1分に対して、就労していない学生は30.6分とやや長い傾向がある。

全国的に大学生の読書時間は減少し、読書時間「0」は49.1%と過去3年間増加している。（注1）

皆川は2016年1月に熊本県の大学1年生と福岡県短期大学1年生計141名に読書に関する調査を行った。一日の読書時間に関する質問「1日にどれくらい読書（マンガ、教科書、参考書は除く）しますか。」への回答は以下の通りである。

・・・読書を「まったくしない」が33.8%、「ほとんどしない」が51.1%であった。これらをあわせると、約85%の学生が読書をしていない・・・（皆川：157）

この調査にも読書離れの傾向は見られる。では、

読書が嫌いかという点、78%が、読書が「好き」、66.4%が、読書することに「魅力を感じる」と答えている（皆川：159-60）。図書館利用の質問「平均すると1週間のうち、だいたい何日くらい図書館に行きますか」には「まったく行かない」が57.4%いる。（皆川：160）。調査結果から皆川は「読書が好きで魅力は感じながらも読書をする習慣がなく、本と出合える書店にも図書館にも行っていないことがわかった」と述べている。読書あるいは図書館に行くことに対して、学生が強い抵抗を感じているわけではないようである。

5 読書推進活動の事例

読書推進活動にはどのような例があるだろうか。ここでは、視野を広げて、「大学」「読書手帳」に限らず、取り組みの例を探る。

5.1 大学入学前の読書推進活動

初等中等教育での読書推進活動は盛んである。立田によれば、「ほぼすべてともいえる小・中学校で一斉朝読書が進められている」（立田：101）。また学校図書館などを利用した読書指導が始まっている（立田：101）。その背景には、読書は基礎学力と関係があり、子どもの読書習慣には親の影響があることが認識されるようになってきたことがある。立田は「学校での読書教育は、家庭環境のもたらす教育格差を是正する意義をもつ」と述べている（立田：107）。

5.2 大学での読書推進活動

読書をしない大学生への対応として、一橋大学附属図書館はブックトークを開催した（田中他）。著者を招いて、講演と参加者との交流を行う。ブックトークを開催するにあたって、図書館は、1回目は他機関と、2回目は学生団体と連携協働した。図書館単独でなく、他者と連携してイベントを行うことは興味深い。

読書実態調査を行った皆川は、授業で学生に書評を書かせた。

今回の調査をする前に、本を読むこと、内容を理解しその魅力を伝えることを目標として、学生は書評を書いた。熊本の大学では学

内の書評コンテストに応募すること、福岡の短期大学では、書評集をつくることを目標にした（皆川：166）。

書評を書くというアウトプットを求められることで、読むことが進むだろう。また、書くことは、コンテストや書評集という発表の機会によって、進むだろう。学生を動かす方法として参考になる。

5.3 近代農村での読書推進活動

山梨の研究目的は「日本の近代化過程における読書の教育的位置づけを歴史的に検討することである」（山梨：2）。学校教育の普及とともに、人々に読書行為が広がる。新たに読書を始める人々を山梨は「読書とはそれまで無縁と目されていた人々」「読書という行為が非日常的なものであった人々」「不読者層」と表現する（山梨：7,8,231,277）。

農村の女性たちが、図書館を中心とする読書活動と関わっていく過程は、読書推進活動の参考になる。1950年代～1960年代、まだ封建性が残っていた土地で、読書になじみがなかった人々を読書に誘う時、何が抵抗になっていたのか、どのような工夫が読書推進に結びついたのか。山梨は飯伊婦人文庫活動を取り上げ、史料から女性が置かれた状況を明らかにした。以下、女性たちの読書体験の概略を示す。

1950年代前半には読書会に行くのに、女性が家を出にくく、家で本や新聞を読むことの家人や親戚への気兼ねがあった（山梨：240-1）。読書会に参加するようになって、村の女性はみんなといっしょであることで安心するので、集団読書の形態を取る（山梨：226-8）。読書活動に参加しても本を読むこと、文集に書くことに困難を覚える（山梨：244-5）。次第に読書習慣をつけていくが、1960年代になると、女性はパート労働に出るようになり、男性は出稼ぎに出るので、家の仕事の負担も増える。さらに、疲れている時には、読書よりもテレビを見るのが楽である。ここで読書離れが起こる（山梨：245-8）。

農村女性たちの読書体験を見ると、読書は一

且できるようになったらそれで目的達成というものではないことがわかる。始める前の抵抗感、始めてからの読むことの困難さ、そして、多忙、テレビなど、読書の時間を奪うもの。読書推進活動を行う際には読書を行う側の立場になって、彼らの生活を知るところから取り組むべきであろう。

注

- (1) 授業の予習復習は勉強時間に含まれる。

参考文献

近藤博之、岩井八郎 編著 2015 年『教育の社会学』放送大学教育振興会

全国大学生生活協同組合連合会 2016 年「第 52 回学生生活実態調査の概要報告」
(<http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>
2017.9.22 参照)

立田慶裕 編著 2015 年『読書教育の方法—学校図書館の活用に向けて—』学文社

田中梓他 2015 年「一橋大学附属図書館における新たな読書推進運動：他機関・学生と連携したブックトークの実施報告」『一橋大学附属図書館研究開発室年報（3）：64-78

「『読書手帳』実施の図書館」
(<http://libyo.web.fc2.com/dokusyotetyo.html>
2017.9.22 参照)

『図書館の自由』第 93 号（2016 年 8 月） 日本図書館協会 図書館の自由委員会

皆川晶 2017 年「大学生の読書に対する意識と実態」『崇城大学紀要』第 42 巻（平成 29 年 3 月）

山梨あや 2011 年『近代日本における読書と社会教育—図書館を中心とした教育活動の成立と展開』法政大学出版局

（原稿受理年月日 2017 年 10 月 10 日）